

161

2009
December

One 同志社大学通信 DOSHISHA UNIVERSITY

purpose

FOR BETTER COMMUNICATION

特集

理工学部60周年・

理工学研究所

50周年を記念して

●同志社人訪問

全日本空輸株式会社
執行役員客室本部長

河本 宏子さん
に聞く

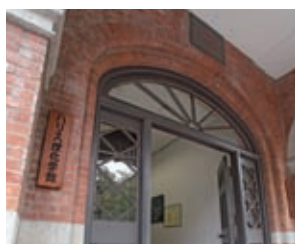


CONTENTS

2009 DECEMBER No.161

『ONE PURPOSE』は在学生・卒業生の皆さんとのコミュニケーションをはかることを目的として発行しています。
ささいなことでも結構ですので、どしどし広報課までご意見・情報をお寄せください。

大学の活動



特集

理工学部60周年・ 理工学研究所50周年を 記念して

2

同志社の研究は今

11

学際的な視点から現代社会が抱えるリスクの本質に迫る
ライフリスク研究センター 橘木 俊昭 経済学部教授

来年度就職をめざす皆さんへ

13

CAMPUS NEWS

15

弓道の全日本学生選手権で優勝! / ビジネス研究科グローバルMBAコース開設 / 留学生別科設立10周年企画 延世大学合唱団コンサート / 継志館がグランドオープン! / 同志社京田辺祭2009 / 第36回 Neesima Room企画展「新島八重の生涯—進取と矜持」 / プロジェクト科目企画コンサート開催 / アッセンブリーアワー企画公開講演会 / 今年度の新司法試験結果について / 本学教員の執筆図書を紹介 / PRESENT! 京都市バス専用1日乗車カード

在学生・教員の活動

OP COMMENTARY

19

野球は小説よりも奇なり—サヨナラ・ゲームの醍醐味— 山口 賀史 文学部英文学科教授

卒業生の活動



INTERVIEW ~同志社人訪問~

20

全日本空輸株式会社 執行役員客室本部長
河本 宏子さんに聞く

MY JOB, MY LIFE ~シリーズ 私と「仕事」~

23

・丸山 剛志さん(2005年工学部知識工学科卒業)
・川崎 真陽さん(2006年司法研究科修了)

ANNOUNCEMENT

25



表紙の情景 [京田辺キャンパスの紅葉]

秋の京田辺キャンパス風景。正門から夢告館、理化学館の前を通り、紫苑館、デイヴィス記念館へと続く道には、たくさんの緑があふれる。表紙写真の左手には、報辰館、理化学館、創考館が建ち並び、奥に見えるのは新島記念講堂の尖塔だ。また左の写真は、医心館から並木道を撮影したもの。撮影時期は10月下旬。並木が赤や黄色に紅葉し、秋晴れのもと煉瓦色の建物に映えて美しい。



特集

理工学部60周年・ 理工学研究所50周年を 記念して

今出川校地にハリス理化学校が誕生したのは

1890年。現在はハリス理化学館として往時を偲ぶ

建物のみが残る。しかし、創立者・新島襄の

理工学教育への思いをハリス理化学校から受け

継ぎ、1944年に設置された工業専門学校を経て、

1949年新たにスタートしたのが同志社大学工学部だ。

2008年度には、理学の領域を取り入れた新たな工学教育を

推進するため、6系(情報、電気、機械、化学、環境、数理)10学科で

編成した理工学部へと生まれ変わった。

今年は工学部誕生から60年、理工学研究所の開設から50年に

なる。そこで今回の特集では、記念式での講演会、伝統の創造科学

教育夏期研修、そして松岡理工学部・工学研究科長、林田理工学研究所長、

田端副学長による鼎談を通して、同志社理工学教育の過去、現在、未来を望む。



「ハリス理化学学校と下村孝太郎」

(要旨)

北垣 宗治 同志社大学名誉教授

「ハリス理化学学校の誕生」

同志社大学理工学部起源が19世紀末のハリス理化学学校にあることは周知のとおりです。しかしながら、ハリス理化学学校は1890年から1897年までのわずか7年間の寿命でした。その短い歴史を辿ると、1889年、アメリカの実業家であるジョン・ナサン・ハリスから同志社に莫大な寄付があったことに遡ります。ハリスは同志社に理化学学校を設立して理科教育を行うためとして、10万ドルという大金を提供しました。

ハリス理化学学校開校の同志社における立役者は、同志社英学校の第1回卒業生の一人であつた下村孝太郎です。下村は恩師・新島襄

の強い要請を受け、留学していたアメリカから帰国し、ハリス理化学学校の設立準備に奔走しました。1890年4月に開校したハリス理化学学校で、下村は教頭(現在の校長)に任命され、5年間にわたつてその仕事に精励します。ハリス理化学学校は、同志社普通学校の5年間の課程を終えた学生その他、同志社以外の学校の卒業生にも入学の機会を与えていました。東京帝国大学を除くと、ハリス理化学学校は当時日本でも優れた科学技術の学校であつたと言ふことができます。

「ハリス理化学学校終焉の背景」

ハリス理化学学校は1893年に第1回卒業式を挙行しましたが、これが短命に終わったハリス理化学学校のハイライトであつたと言えます。では、わずか7年間で学校が機能停止に陥つた原因は何だつたのでしょうか。私の見るところ、原因は2つあります。まずは1890年に新島が46歳という若さで亡くなったことです。2つ目は、発展の大きな後ろ盾であつたアメリカン・ボードと対立するようになり、ついに関係を断絶するに至つたことです。

アメリカン・ボードとの関係を友好に保つた新島の死後、後を継いだ者たちはアメリカン・ボードに従属してはならないと考えました。同志社は理事会に管理を集中することになりましたが、それによつてアメリカン・ボードと

の衝突が起つてきました。まず起つたのが宣教師館問題です。アメリカン・ボードが建てた宣教師館が9棟あり、当時それらは名義上同志社の所有となつていたので、理事会は宣教師館に住む宣教師から家賃を取り立てることを主張しました。また、同志社病院と理化学学校は同志社理事会とアメリカン・ボードの指名する委員会とが平等の立場で管理運営する体制だつたのですが、理事会は病院、理化学学校とも完全な同志社理事会の管理下に置くことが必要だと主張しました。

ハリス理化学学校で理事会の意見に正面から反対したのが下村でした。1895年5月、理化学学校教頭の辞表を提出、その後の理化学学校はまるで舵を失つた船のようでした。そして、こうした状況を知つたハリスは、アメリカン・ボードに寄託してある基金が生み出す利息を同志社に送らないよう措置を取つたのです。ついにアメリカン・ボードの宣教師団が三斉に同志社から引き上げ、1897年にハリス理化学学校は短い歴史に幕を下ろしました。

「日本の産業界発展に大きく貢献」

アメリカン・ボードから受けていた財政支



援を失つた同志社は、財政的にきわめて苦しくなります。やがて、同志社の理事会は総辞職。その結果、下村が名誉社長として担ぎ出され、その後、第4代、第5代社長を挟んで、1904年、第6代社長に就任しました。

下村は1895年に同志社を去つて以後、石炭から良質のコークスを取り出すことに成功し、その生産過程で副産物としてコールタールやガスを取り出すなど、技術者としても当時の日本の産業界に大きな貢献を果たしています。下村は独立不羈の人でした。ハリス理化学学校すべてをお膳立てし、その危機にあたつては身を持って守ろうとして戦い、同志社の危機に際しては捨て石となつて働きつつ、科学技術の分野では当時の第一線の事業をやり抜いた、同志社の生み出した誇るべき人物であると私は考えます。

「PROFILE」

1952年同志社大学文学部英文学科卒業、その後修士課程修了。1956年セントアンドリュース大学大学院を修了。本学で長らく英語・英文学を教える学生部長や大学評議員、法人理事などを歴任した。

同志社大学 理工学部60周年 理工学研究所50周年 記念式

同志社大学理工学部60周年、理工学研究所50周年記念式が10月17日(土)、京都タワーホテルで開催された。会場には八田英二学長、大谷實総長、野本真也理事長をはじめ、現役教職員や工学部の卒業生などが多数詰めかけた。

第一部では、北垣宗治同志社大学名誉教授と、株式会社半導体エネルギー研究所代表取締役の山崎舜平氏による講演会が行われた。まず、北垣氏がハリス理化学学校誕生時における下村孝太郎の活躍と功績について紹介。新島死後のアメリカン・ボードとの関係、ハリス理化学学校の衰退へと話が展開された。続く山崎氏の講演は、恩師・加藤与五郎同志社大学名誉文化博士の紹介から始まった。軽井沢での創造科学教育夏期研修の思い出などをスライドで説明した後、R&D（研究開発）イノベーションの話題に入った。

「日本におけるイノベーション・半導体技術、知的財産および事業開拓」

山崎 舜平 株式会社半導体エネルギー研究所代表取締役

「R&Dイノベーションウェイブ」

研究開発の世界にも山や谷があり、まずそれをウェイブとして眺めてみましょう。ウェイブはR&Dイノベーションにおいては、プロパティ時代とアンチパティ時代、2つに分類できます。プロパティ時代は産業用の研究開発を促す時代、逆にアンチパティ時代は基礎研究を重視した真理探究の時代です。ウェイブは長周期、中周期、短周期に大別できます。長周期はプロパティとアンチパティの時代がそれぞれ40〜60年続き、中周期は産業の成長と衰退がそれぞれ15年、研究者や企業の活動期と非活動期で表される短周期は3〜5年の周期になります。この3つのウェイブが重なり合って栄枯盛衰が起るのです。



日本における長周期ウェイブは、明治維新から始まる第1次アンチパティ時代が、1899年世界の知的所有権を共通化するパリ条約参加まで続きます。その後、日本の技術開発が盛んになり、外国の技術を封鎖したこともあって自主開発せざるを得なくなる時代が、第1次プロパティ時代です。1945年に第2次大戦が終わると、真理探究の時代が訪れ、第2次アンチパティ時代になります。そして2000年に内閣が「知財立国」を発表、第2

（要旨）

次プロパティ時代に突入し、大学自身も産業の役に立つという方向に変わってきています。日本の物理学、化学のノーベル賞受賞者の発明発見年を見ると、湯川秀樹先生を除き、全員が1940年代から90年代の第2次アンチパティ時代に集中しています。大学が真理を探究するために企業との共同開発を

拒否し、その結果大学から多くのノーベル賞受賞者が輩出されたのです。その意味から言うところ、今後、国立大学の独立行政法人化によって基礎研究が軽視されれば、大学からノーベル賞に値するような発明は出にくいのではないかと気がします。

「半導体に見る中周期」

半導体の場合は、1970年頃から大きな波が来て、産業的には大型コンピュータの時代になり、そのメモリーとしてのDRAMで日本は世界の50%のシェアを占めることになりました。その後1985年頃からノートPCの時代が到来し、CPUが中心となって、ウィンドウズ、インテルのいわゆるウィンドウズ時代になりました。そして2000年頃からIT時代と言われ、フラッシュメモリーを使用する携帯電話やデジタルカメラに代表される時代に入ってきました。この15年周期の中周期ウェイブで見ると、今はITの爛熟期で次の産業に移行する時代と考えられます。

「真の発明は基礎研究からなされるべき」

中周期とは異なる個人的レベルの短周期という観点から見ると、私自身も1970年前後から始まる5年間を最初の山として、ほぼ5年ごとに山と谷を繰り返してきました。1965年の触媒化学気相成長法に始まり、不揮発性メモリーの発明や、半導体エネルギー研究所（SEL）時代には、薄膜太陽電池やフレキシブルPUといった成果があります。

世の中の山や谷にはいろいろな周期があり、ある一つのものが単調に成長し続けるということとはありません。基礎科学分野で発見された現象を究明し、新しい産業に結びつけるというのが本来あるべき姿であり、真の発明は基礎研究からなされるべきです。問題はニーズの本質をものにできるか、その意味においては基礎と応用は均質するのではないかと考えています。

私が大学時代に所有した特許を許諾したライセンスの数は、外国企業が15社、日本企業は19社にのびります。IBMやTI、インテルといった世界有数の企業が学生の発明に関心を示してくれたことに感謝しています。また、大学時代に自由な研究の場を与えてくださった同志社大学と多くの先生方、そして加藤与五郎先生のご指導に心から感謝申し上げます。

「PROFILE」

1965年同志社大学工学部電気学科卒業、その後修士課程、博士課程修了。1980年に現在の株式会社半導体エネルギー研究所を設立。現在は個人で5000件以上の特許を保有し、ギネスブックにも登録されている。

夏の軽井沢で 創造力を鍛える

創造科学教育夏期研修

軽井沢の「加藤科学振興会軽井沢研修所」で、毎年夏休みに実施されている創造科学教育夏期研修。理工系の学生を対象に行われるこの研修は、加藤与五郎同志社大学名誉文化博士（1872～1967）が1957年、科学技術分野における創造力の開発を指導する場として始めたものだ。以来、本学卒業生で日本を代表する半導体研究者の山崎舜平氏らの支援にも支えられ、現在まで途絶えることなく続けられている。今年は8月10日（月）～27日（木）の18日間にわたって行われ、留学生を含む11人の学生たちが参加した。



8月22日（土）午前6時30分、この日、朝の高原には霧が立ちこめていた。6時に起床した全員が前庭に集まり、霧雨が薄く髪を濡らす中、恒例のラジオ体操が始まった。

ラジオ体操の後にはジョギングをこなし、ようやく8時から朝食が始まる。研修が始まるのは9時からなので、そうゆつくりくつろいでもいられない。特にその日に発表を控えた学生は、内容の事前チェックなどいささか慌ただしい時間を過ごすことになる。

窓外に青々とした木々を望む研修室は、静寂に包まれ、自然と集中力が高まるこのうえない環境だ。席に着いた出席者を見ると、先ほどまでのリラックスした服装から、教員は背広にネクタイ、学生も襟付きシャツというスタイルに着替えられていた。ここが学びの場であるということを強く意識させる。この日のある発表者のテーマは「深夜覚



醒時に音声で時刻を知らせる時計。深夜に目が覚めたとき、時刻を確かめる行動が睡眠を阻害することから、自動的に音声で時刻を知らせしてくれる時計があれば便利では

ないか」。自身の経験をもとに考えたという時計は、起きているときと眠っているときの脈拍の違いを応用するものだという。

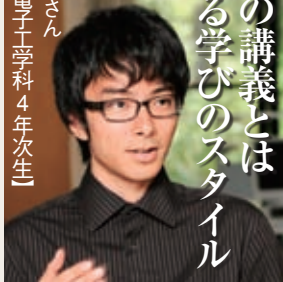
ホワイトボードに発表のテーマと論旨を書きとめている段階から、アイデアの設定自体に異論が続出した。「睡眠のモードやメカニズムについて、もう少しきちんと勉強した方がいい」と生命医科学部の教員からも指摘が入る。睡眠時無呼吸症候群の発見に使えるのでは、という見方もあったが、既に開発済みの製品が存在することのこと。「だが、既にあるからやめるのではなく、もっと



参加学生の声

普段の講義とは 異なる学びのスタイル

【澤崎守さん
工学部電気工学科4年次生】



この研修には2年のときに初めて参加し、今回は2回目になります。1回目に参加した理由は、3年の秋からダブルディグリー制度を利用してフランスに留学する予定だったので、その前に研修でフランス人の留学生と一緒に研究する機会を持ちたいと思ったことがきっかけでした。

この研修は、大学の講義とはまったくスタイルが異なります。普段の授業は先生の講義や指導が中心となっており進みますが、ここではテーマも何もない状態からスタートし、自分で考え、発表していきます。自分で考えたアイデアはそう簡単には先生方に通じません。なぜかというところ、自分

安く作るにはどうすればいいか、などの改良点も考えるべき。既存のものがあるからといって諦めていては何もできない」とある理工学部教員から指導があった。結局内容を練り直し、翌日再度発表に臨むことになった。

厳しさを痛感させる光景だったが、教員が鋭く論理的に発表者を追い込んでいくこともこの研修の主旨。どんなに完璧に見える発表でも、無条件に賞賛されることはまず

あり得ない。指導するのは、理工学部と生命医科学部の現任教員を中心に、名誉教授や研究者として活躍する卒業生も加わっている。この日は、11人の学生に対して指導陣が8人、という贅沢な学びの環境だ。

その後、午前中は発表と質疑応答が続き、昼食を挟んで午後からは自由時間となるが、遊びに出るような学生は一人としていない。ここでいう自由時間とは想像力を働かせて“自由に考える”時間なのだ。

の知識を使いきれていないからです。自分でもイメージは持っているのですが、それが相手に伝わらない。厳しい指摘を受けると気落ちしますが、そういう経験をするために来ているのだと思っています。

私はこの二年間フランスに留学していたのですが、今年もう一度参加しようと思ったのは、フランスで学んできた成果を試すためです。日本の大学は専攻を決めて学ぶ形になりますが、フランスでは情報、化学、電気、物理、機械、すべての分野を学ぶので広い視野が持てます。そういう経験を経て、1回目とどう変わっているか、自分でも確認したいという気持ちがあったのです。

社会に出て実際に企業で働く場合、何もない状態から出発しなければならぬことも多いと思います。テーマなど何も決められていない状態で、アイデアを考えないといけないでしょう。この研修は自分でそれを引っ張り出す場です。努力は必要ですが、そういう力が鍛えられると期待が持てます。

知識ではなく知恵を 積み重ねる場

【岡田寛之さん
工学部電気工学科4年次生
博士課程(前期課程)1年次生】



大学院で研究していますが、私が普段やっていることは指で指せば点のような狭い範囲で、あまり広がりはありません。いろいろな考え方が必要なので、違う視点から物事を捉え、自分の知識や分野を広げつつ、知識から知恵にしていきたいと思っています。今回初めてこの研修に参加しました。

ここでする学んだのは専門的な知識だけではなく、知恵を積み重ねる場です。最初は通じないということがあります。通常は、最初に文献を調べてから研究を始めるのが一般的なやり方ですが、この研修ではそうではありません。自分でできるだけ考えて、必要最低限の部分だけを文献から引用するようにしています。あまり文

献に頼り過ぎると、それに促されて自分の考えが無くなってしまうからです。重要なのは自分で考え出すことです。ここでは自分自身が核となっており、初めて自分のアイデアが出せるようになる。研究室とは進め方がまったく違います。研究室ではミスを出不さないように注意しなければなりません。ここでは失敗してもいい、失敗を恐れずいろいろなことを考え出した方がいいと思えるのです。

発表の前日は徹夜になることもしばしばあります。自分の発表が終わった後、ホッとします。でもまたすぐに次の順番が回ってくる。それが楽しみでもあるのです。何回か経験してコツのようなものを実感してくると、次はこうすれば良い発想だと言ってもらえるのではないかと、という期待が持てます。面白い、良い観点だね、と認めてもらえたら嬉しい。そういうふうになた何かを考えて、知識ではない知恵が積み重なっていくのだと思います。

●加藤与五郎博士PROFILE●



〈同志社社史資料センター所蔵〉

1872年、愛知県生まれ。1895年にハリス理化学学校を卒業。その後渡米し、マサチューセッツ工科大学(MIT)のA.A.ノイス教授に師事。帰国後、東京高等工業学校(現・東京工業大学)の教授に就任。在任中の研究に基づく特許は300件を超え、工業化のために設立した会社は約10社に及ぶ。代表的な発明にフェライトマグネット、フェライトコア、硫酸法によるアルミニウム精錬などがある。創造の本質と創造教育の重要性を説き、1957年から学生を軽井沢に招いて創造教育実践のための研修指導を始めた。1960年には私費を投じて長野県軽井沢に「最高の創造ができる人—A man (Able man) たちの学び舎」として創造科学教育研究所を開設した。

創造科学教育夏期研修の歴史と意義

第一回の研修に工学部3年次生として参加した大谷隆彦同志社大学名誉教授と、大谷名誉教授の教え子で学生時代に4年間研修に参加した土屋隆生理工学部情報システムデザイン学科教授に、創造研修の歴史と意義について伺った。



大谷名誉教授

土屋理工学部教授

大谷名誉教授は「加藤与五郎先生による創造教育実践のための研修指導は1957年に始まりましたが、当初の3年間はシーモアハウスで研修が行われていました。当初の研修期間は、7月20日頃から8月20日過ぎまでの1ヶ月以上にも及びました。朝9時に集まり先生に挨拶

して「目の研修がスタートするのですが、誰がどんな発表をするか」ということも学生の自主性に委ねられている。学生の発表に関連して、加藤先生が「自身の経験を話してください」と振り返り、研究の解説をしてくださいました」と振り返る。

1960年、加藤博士は自身の財産を投じて、軽井沢町上の原に創造科学教育研究所を開設した。開所式での加藤博士の挨拶には、創造科学教育の意義、目的が明確に説明されており、現在も研修の初日と最終日に学生たちはそのテープを聞くことになっている。

加藤博士の没後、研究所は加藤科学振興会に寄付され、同会のセミナーセンターとなった。その後建物の老朽化で増改築が計画されたが、周囲環境の変化などの事情から現在地に移転、1986年に加藤科学振興会軽井沢研修所として現在の建物が新築完成した。

加藤博士の没後はこの研修を工学部の授業として継続させる案も出たが、正課の授業に組み入れるのは難しく、理工学研究所の行事として、加藤・山崎記念基金運営委員会の教員が中心となって実施と指導にあたっている。現在、運営委員会の委員長を務める土屋教授は、研修の意義について次



〈同志社史料センター所蔵〉
1963年加藤博士と研修生たち

のように語る。

「加藤先生の教えは、新しいアイデアを出そうとする場合、繰り返し何度もアタックしないといけない、精神を集中して考えないといけないということだと思ふのです。学生はまず自分ひとりの力で考え、先生方からの指摘を受け、また一生懸命考える。それを何度か繰り返し、最終に1つか2つ独創的なアイデアが出てき

加藤与五郎先生の教え

株式会社半導体エネルギー研究所代表取締役・

山崎 舜平氏



いといけない、

私は2年次生のときに初めて創造科学教育夏期研修に参加し、以降毎年軽井沢に行つて、5年間加藤先生から直接教えを受けました。この研修では、ハウツウ的なものは生まれません。それよりも研究の仕方、心の持ち方、あるいは人生の歩み方を学ぶのです。教えを受けてそのまま記憶するのはなく、考える癖をつけることが大切で

す。「苦しいときは必ずある。そこから逃げないで真正面から取り組みなさい」というのが加藤先生の教育でした。

そして、ただ議論するだけでは意味がありません。個性を持つて主張することは必要ですが、真理探究の基本的な精神を常に持つていなくてはならない。創造と清き心、その両方がある

ます。そうした努力を1年間続け、その成果を持つてまた翌年に参加してくれることを願い、18日間の研修は終わります。この研修では何も新しいところからアイデアを生み出すことを自ら体験し、その努力を続けることに意義があるのです」。

大谷名誉教授や土屋教授がそうであったように、研修に参加した学生がやがて教員となり、研修で学生たちを指導することもある。その絶え間ない連鎖が、加藤博士の創造教育を伝え、同志社大学理工学部の伝統を繋いでいっている。

というのが加藤先生の教えです。先生はまた、国を救うくらい的人物を育てたいという願望と育べき人はこういう形でないといけない、という思いがはつきりしていましたね。知識を強制するのではなく、人間としての考え方や心の持ち方を重要視されていました。そういうことに対してはきわめて厳格で、脇道にそれるとすぐ怒られたものです。

この研修に参加している学生たちは幸せだと思います。普段これほど先生方と1対1、1対多数で議論してもらえない環境はあまりないことでしょう。先生はなぜこう言ったのか、と考えていくことによって、自分の成長の肥やしになるのです。先生方も真剣に無欲で取り組んでいる。感謝すべきことだと思います。

鼎談

同志社理工学教育研究と

京田辺校地のこれから

この半世紀、同志社大学の理工系教育研究の旗手としての役割を担ってきた理工学部および理工学研究所。これまでに培ってきた蓄積を踏まえ、今後、新たな時代に向かってどのような未来図を描こうとしているのか。2013年度のキャンパス再編計画における京田辺校地の展望を含め、松岡敬理工学部・工学研究科長、林田明理工学研究所長、そして田端信廣副学長が語り合った。

松岡 ●まず理工学部の歴史を振り返ると、1949年に工学部として電気機械化学の3系を柱にスタートし、その後は6学科の時代が長く続きました。1994年京田辺校地への移転と同時に情報系の知識工学科現インテリジェント情報工学科を設置して4系7学科になり、2004年に情報システムデザイン学科、環境システム学科の2学科を追加して5系9学科、2008年4月には理工学部改組再編して現在の6系10学科体制となつて

います。理工学部への再編構想は1998年、工学理学の領域を超えた学際的研究の基盤づくりのため、大学院工学研究科に数理環境科学専攻修士課程を設置したことを契機として始まっています。一方、大学全体としては生命医科学部、スポーツ健康科学部が新たに誕生する中で、工学部はどうあるべきかという問いへのひとつの答えが、理工学部への再編でした。またそこには、自然科学の分野を含めた幅広い知識を持った人材を社会が要求しているという事実もあります。そして忘れてはならないのは、アモスト大学で理学士を取得した創立者新島襄には、当初から大学で理学教育を行いたいという思いがあったこととです。その思いをうなづいていくという目的も再編の大きな骨子と言えるでしょう。

■松岡敬 理工学部・工学研究科長



林田 ●理工学研究所は学生にはあまり馴染みのない組織かと思いますが、同志社大学には長い歴史を持った3つの研究所があります。人文科学研究所、アメリカ研究所、そして1959年に誕生した理工学研究所です。理工学研究所では、独創的先進的な研究を進める一方で、国内外の学外機関はもとより文系を含む学内他学部の教員との共同研究も活発に行っています。また、全学の自然科学教育にも関わり、理工研所属の教員が全学共通教養教育科目の自然科学系科目を担当しています。さらに、「理工学研究報告」という学術雑誌の発行、創造科学教育夏期研修の主催、そして例年12月の第1土曜日には学内外の研究者や一般市民にも公開して、研究発表会を開催しています。今年は12月5日に寒梅館で開催しますが、所員の研究発表の他、赤ちゃん学研究センターや京都府立医科大学の先生にも特別講演をお願いしていますので、ぜひ多くの方に参加いただきたいと思っています。

田端 ●同志社大学は1949年に商学部と工学部を開設してから、半世紀以上にわたつて6学部体制が続いてきました。それで外部から見ると、同志社は文系の大学という印象が強かったかもしれません。将来の展開を考えた場合、理工系の教育研究組織が工学部のひとつには甚だしくバランスを欠きます。また「総合大学」を掲げているわけですから、激しい大学間競争に勝ち抜いていく意味でも、生命理学、工学、文理融合といった要素を含めた広い意味での理工系の学部大学院の強化が必須となっていました。そのため、近年文化情報学部、生命医科学部、スポーツ健康科学部、心理学部と新しい学部が設置されました。もちろんこうした新学部設置には、新たな教育研究領域の開拓と共に、松岡先生が言われたように、社会のニーズに応えていくという意味があります。かつてなら固有の教育研究組織あるいは領域として認知されていなかったような生命医科学、スポーツ健康科学、文化情報学といった分野は、今や明らかにひとつの教育研究領域として認知されています。同志社大学がこれまでの蓄積を踏まえ、そうした分野に精通する人材を求める社会的ニーズに応えていくというのは必然のことでした。そしてまた、2013年度に向けた同志社大学全体の再編という大きな戦略の中での、京田辺校地における理工系の強化という位置づけもあります。

松岡 ●理工系を強化するという意味では学部再編の次のステップはやはり大学院の充実強化です。京田辺校地をどのようにしていくのかという大きな課題を投げかけられている今、我々は2012年度に現在の工学研究科を理工学研究科に改組することを目指してい



■ 林田 明 理工学研究所長

ます。その中で検討しているのが、例えば、本学が全国13拠点大学のひとつに選定された国際化拠点整備事業(グローバル30)に見合う新たな国際科学技術コースを設置することです。これは生命医科学研究科でも検討されていますが、今後は各学部研究科がそれぞれで実施することに加え、横の繋がりを強化することによって京田辺校地を活性化させていくことも考えないといけない。そうした大学院の改革充実強化が、まさにパワーを持った総合大学を形成するひとつの足がかりになつていくと思いますし、またなつていかなければならないと考えています。

田端●大学院の充実強化は、単に工学研究科固有の課題ではなく、2校地の特徴づけや大学全体の将来展望に関わってくる問題です。2013年のキャンパス再編計画によって将来今出川校地と京田辺校地をどのように特徴づけていくかは、単純に「文系」と「理工系」というふうに分けられがちなのですが、それはまったく違います。2つの校地の特色を明確に

位置つけたうえで教育研究の特徴をはっきり区別していくため、京田辺校地は、身体生命、先端科学情報を中心とする高度な複合的研究拠点を目指すわけですが、その点から言えば、京田辺校地は明らかに研究の比重が高いキャンパスになります。それは今出川校地と比較した場合、総学生数における大学院生の比率が高いキャンパスになるということです。今出川校地がリベラルアーツに重点を置いた教育を特徴とするのに対して、京田辺校地はグローバルスタンダードを重視した複合的で高度な教育研究機能を持ったキャンパスになります。今後、京田辺の学部研究科が協力体制のもとに融合し、学部生の半数程度が大学院に進む「大学院大学」のような形をにらみながら、京田辺校地における教育研究体制の拡充を図っていく。その意味で、松岡先生の言われる大学院の拡充は、2つのキャンパス構想の延長線上に出てくる課題なのです。

林田●大学院を充実するのは、もちろんより高度な教育を受けた学生を社会に輩出するという目的がありますが、工学研究科だけではその効果は限定的でしょう。理工系の研究科すべてが総合的に充実していくことによって、個々の学生にとつても、いろいろな分野で学際的な教育を受けられるという利点が生まれます。実際、理工学研究科では研究科を超えた共同研究を行っており、そこに大学院生も加わっているのですが、そういった学際的な研究は多くの大学院生の能力を伸ばせる可能性にあります。そういう形をもっと充実させていくことが、大学院改革の理想の姿と言えるのではないのでしょうか。

松岡●理工系の学部研究科はそれぞれで担うものがありますから、大学全体が動いていく中でそれらをいかに融合させていくかは重要な問題です。この数年でさまざまな分野の教員が増え、それに伴って今まで着手できなかったような研究分野も展開できる環境が整いつつあります。同時に、そういった動きを一人ひとりの教員がいかに意識していくか、二人ひとりにいかに伝えていくかという点も重要だと私は思っています。自分の研究だけでなく横のつながりで進めていく、その仕組み作りも次のステップを目指すうえでの課題だと言えます。

林田●理工学研究科でも、部門研究では文系との共同研究に重きを置いています。理工学部の環境系の教員と文学部の教員が一緒に考古学に関する研究をしたり、理工学部の電気系と心理学部の教員が共同でインフラストラクチャーの研究をしたり、というような実績がありますから、そうした芽は着実に芽吹いているとは思っています。

松岡●研究以外の面も含めて教員の交流が深まってくると、自然に学生間の交流も生まれるでしょうね。2つのキャンパスを学生全体がいろいろなものを吸収し学び得るようなキャンパスにしていかなければならない。2013年度以降、今出川校地と京田辺校地がいかに融合しながら同志社大学の教育を進めていくか、これは次の大きな課題だと思います。

林田●京田辺校地の中での学部間融合ももちろん大事なのですが、教養教育に関しては京田辺と今出川の相互作用がすごく大事だ

と思うのです。理工学部の学生にも神学部や文学部の友だちがいる、まったく異なる分野を勉強して自分の知らない世界を知っている友だちがいる、そういうことは将来に向けてのとても大きな財産になるでしょうね。まさに総合大学の利点です。

田端●京田辺校地を「京田辺工科大学」にしてはいけません。教育のカリキュラムでは明確に分かれている部分がありますが、人格や世界観の形成の意味では、文学部の学生も理工学部の学生も変わりはありません。両キャンパス間をうまく交流させるような仕掛けをどう作るか、これからの大きな課題だと思っています。3、4年次になると研究室に所属するので難しいかもしれませんが、1、2年次のうちは両方のキャンパスに関われるようなカリキュラムの編成が理想的です。ただ、それはあくまで制度であつて、林田先生が言われているような精神的風土を失つてはいけません。2つのキャンパスの教育研究上の特色や強みを生かして学生の教育にあたる、それは単に両キャンパスを移動するようなカリキュラムにするだけでなく、同志社大学はひとつなのだという精神的風土を培っていかなければなりません。

林田●ただ授業を受けるだけでなく、キャンパスにいろいろな研究をする人がいて、その設備も整っている、そのような環境にどれだけ自分に関わって活用しているか。それは人生の中で非常に貴重な体験の期間だと思いますね。
田端●その意味では、京田辺校地は絶対的な教育資源を持っています。充実したインフラはもちろん、木津川市にある学研都市キャンパスなども含めると、京都府の南部から奈良

までを同志社のエリアとして学術展開しているリソースがあるのです。またそれに関連して、国際化という意味でも、さまざまな形で留学生を誘引しやすい条件が京田辺校地には整っていると思います。

松岡●国際化ということでは近年、理工学部工学研究科では海外の大学との協定が増えています。ダブルデグリー制度もフランスを中心に既にスタートしていますが、これをアジアの大学にも展開していく予定です。留学生入試でも、理工学部では受験者数が増えてきています。海外から同志社に目を向ける人が増えてきたということです。我々が目指すのは、大学院で高度な教育を受け、世界に出て活躍できる学生を二人でも多く育成し、その実績を積み重ねていくことです。さらに、国際的な大学であろうとすれば、いろいろな国から来る優秀な留学生を日本企業に送り出していくこともこれからの評価につながります。そういう人々を輩出していく環境づくり整備を進めていくことがこれからの大きな課題です。「グローバル30」に採択されたことで、先ほど申しあげたような理工の取り組みと大学全体の動きが連動していくはず。今後は、京田辺校地の国際化に向けた環境整備が積極的に進められるだろうと期待しています。

田端●最後に、これから先の50年を考えたとき、理工学部工学研究科や京田辺校地はどうなっていくのか、どういうふうにしていきたいか、という点について、お二人の考えはいかがでしょうか。

松岡●50年先にどうなっているかは難しいですが、ひとつには「大研究科」という考え方が

出てくるのではないのでしょうか。ひとつの大きな自然科学系の研究科ができ、その中で各部門や専攻を構築していくような強い連携を生み出していくことが重要だと思います。国際化という意味では、日本や海外の企業が京田辺校地に足を運んで共同研究を行う、あるいはそのオフィスが大学内にあつて学生と緒にプロジェクトを動かしている、というところまでは実現させたいですね。留学生育成の次のステップとしては、海外の企業が京田辺校地に研究の拠点を置きながら人を育成し、研究内容を世界に展開していく、そういう夢を持ちたいですね。

林田●昔からキャンパスのイメージと言うと、今出川はアメリカ東海岸の歴史あるリベラルアーツカレッジ、京田辺は広大な敷地を持ち大学院教育や研究を重視する西海岸の大学、というような印象がありますが、ある意味京田辺キャンパスが成熟するというのは、アメリカのユニバーシティダウンのように大学が地域と密接に連携し、ひとつの町としてキャンパスも

成長するという形が京田辺校地のあり得る姿かもしれませんね。

松岡●確かにそんな状況が京田辺校地で実現すれば、ちよつと違った雰囲気のカンパスになるでしょうね。それから、理工学研究所のこれからという点で言うと、やはり大学全体の研究機関として全学部間を横断するようなパイプ役を担ってほしいと、私は個人的に思っているのです。そうなることで、先ほど申しあげた大研究科のようなものができる原動力になると思うのです。

田端●確かに50年先を描くのは難しいですが、その重要な触媒になるのが教育研究の国際化だということは確かでしょう。50年前の工学部と現在を比較すると、建物や実験施設は良くなっていますが、教育のスタイルはあまり変わっていない。これからの50年は、これまでの50年間とは比べものにならないほどの凄まじい展開が起きていくでしょう。京田辺校地の他学部と有機的に絡むことが前提ですが、国際化が触媒となつて活性化すれば、理工学部はこの先50年で大きな成長カーブを描くことができるはずです。理工学部が先頭に立つてグローバルスタンダードをしっかりと作っていく、その先に未来の姿は必ず見えてくるのではないかと思います。



田端 信廣 副学長

キャンパス再編計画

従来のような横割型の2校地体制を改め、2013年度には学部教育をひとつの校地で、貫させる教学体制に再編される。それぞれの校地の特色を明確に位置づけ、4年間の貫教育によって教育効果を高めることを目的としている。

【今出川】リベラルアーツ型教養教育ゼミを中心とした専門教育を展開する文系学部、教育拠点、専門職大学院や独立研究科等を中心とする高度専門職業人養成の拠点。海外の一流大学が集積する国際的キャンパス。

【京田辺】理工系と文理融合学部が集積。実験・実習、フィールドワークを重視する複合的教育拠点。身体・生命、先端技術情報に関する国際的先端研究拠点。

国際化拠点整備事業(グローバル30)

国の留学生30万人計画に基づき文部科学省が打ち立てた事業。英語による授業実施体制の構築、留学生受け入れのための整備、戦略的国際連携の推進など、国際化拠点を形成するための取り組みが支援される。今年度の申請においては、国立私立あわせて13大学(国立：東北、筑波、東京、名古屋、京都、大阪、九州、私立：同志社、慶應義塾、早稲田、上智、明治、立命館)が国際化拠点大学として選定された。

詳しくは、本学Hd(<http://www.doshisha.ac.jp/>)をご覧ください。

学際的な視点から現代社会が抱えるリスクの本質に迫る

ライフリスク研究センター

リスク社会と言われる現代、人はこの世に誕生してから生を終えるまで、多種多様なリスクに直面する。人間生活に起こるさまざまなリスクを未然に防ぎ、発生したリスクに対して適切な対応を図っていくにはどうすればよいか。経済学、社会学、心理学、哲学、理工学、生命科学という広範囲の学問分野を結集し、学際的な視点からリスクの本質を研究するのが「ライフリスク研究センター」だ。10月3日と10日には開設記念シンポジウムを連続して開催し、本格的に活動を展開している同研究センターの役割について、本学経済学部教授の橘木俊詔センター長に伺った。



現代社会において人々が直面するリスクは、社会システム上の不備や環境の変化などによって、飛躍的に増加・多様化しています。例えば、子どもの誕生においては、医療システムの不備による産婦人科医の不足などが原因となってリスクが高まっています。学校教育を受ける期間についても、親の経済的事情などが原因で、学業を継続できなくなるリスクがあります。社会人になると、会社の倒産やリストラによる失業のリスクがあり、若年労働者の非正規雇用化は結婚のリスクをも増大させています。さらに、企業の雇用形態がワークライフバランスを欠いたものである場合には、女性が働きながら出産や子育てをすることができなくなり、女性のキャリア形成が阻害されるリスクが高まります。そして高齢になれば、疾病や要介護のリスクが大きくなる一方、医療サービスの高価格化、良質な医療介護サービスの供給不足、年金など社会保障財政の悪化により、幸福な老後を維持できなくなるリスクが待ち受けています。

こうしたさまざまなリスクに関して、国内外で数多くの研究が行われてきました。しかし、リスクを生み出す社会制度上の不備などの問題が、人生のさまざまな

な局面におけるリスクとどのように関連しているかなど、包括的なアプローチによる研究は十分に進んではいません。さまざまなリスクについて個別に研究するのでは、リスク社会の本質に迫ることは不可能です。そこで、本学に開設されたのが、リスク社会の本質的構造を明らかにし、より有効性の高い政策の提示を目的とする「ライフリスク研究センター」です。複雑化するリスクに対応するには、多角的なアプローチが必要です。そのため、私が専門とする経済学をはじめとして、社会学、心理学、哲学、理工学、生命科学といった多彩な分野の研究者が集まり、それぞれの専門分野のノウハウや知恵を出し合い、学際的な研究を行っています。これが当センターの特徴の一つです。

具体的な研究実施にあたっては、テーマ別に4つのパートを設けています。第1の研究パートは社会保障。ライフリスクの中で最も重要と言える疾病と老後の経済保障について、現在、医療保険、公的年金制度といった社会保障制度の中でリスクの軽減が行われていますが、少子高齢化の進展によって制度の財政破綻という新たなリスクが発生しています。医療制度に関しても、医療過誤、医師不足などのリスクが、患者はもちろん医師にも大きな影響を与えています。これらの問題を行動経済学的アプローチによって分析していきます。

第2のパートで扱うのは、女性のライフリスクについてです。女性にとって最大のライフリスクは、就業、結婚、出産、育児といった活動によって生じます。日本における女

橘木 俊詔 【経済学部教授】



性の非正規雇用比率の高さも問題ですが、正規労働者として働いている女性が結婚によって就業機会を損なうリスクも大変大きい。それが結婚を躊躇させる要因となり、ひいては少子化を進行させることにもつながっています。この問題を解決する方法として、就業におけるワークライフバランスの改善がありますが、まずワークライフバランスの実態を明らかにし、問題がどこにあるかを見極め、改善に伴う企業のコストとメリットについて考えます。

第3のパートでは、教育制度のもたらすリスクを扱います。教育には学校と家庭企業の3つの分野があり、いずれも看過できない重要な問題を抱えています。学校教育において今の日本では経済的に恵まれた環境にいる人は質の高い教育を受けられ、そうでない人は望み通りの教育を受ける機会を閉ざされているという現状があります。また、教育制度の失敗は労働市場における不均衡状態を作り出しており、教育制度のあり方が労働者の雇用可能性にどの



ような影響を与えるか、理論的・実証的に調べていきます。

そして第4のパートでは、社会システムのリスク分析を行います。例えば、自動車を中心とした交通システムには、常に交通事故のリスクがあります。また、日本人が最も不安に感じている地震などの災害のリスクは、防災社会資本やコミュニティ機能といった社会システムと無縁ではあり得ません。そこでは災害後のリスク管理やメンタルケアまで包括的に分析する必要があります。

センターの研究者は、これらの4つのパートに沿ってなどらかなグループを構成し、研究を進めていきます。研究者それぞれの自由意志を尊重し、個々に関心のあるテーマで研究していくのと同時に、グループで一つのテーマを設定して進めていくという方法も取りながら、ライフリスクの本質的構造を明確化することが目標です。

また、センター内の研究のみにとどまるのではなく、シンポジウムやパネルディスカッションの開催を通して、できるだけ一般の人々との接点を持つことも、当センターの大きな役割です。国民一人ひとりが不安を抱え、できれば安心できる生活を送りたいと願っているわけですから、その答えを見いだすには研究者だけが形而上学的にやっていけばいいというものではありません。リスクの本質にアプローチしていくためにも、我々の側からできるだけ一般の人々に問いかけていきたいと思っています。これからの日本のあり方を考えたとき、

誰がリスクに対処するのかということも大きな問題です。国なのか、コミュニティなのか、家族なのか、あるいは誰でもなく自己責任において対処すべきなのか。大きく言えば、アメリカ型の自立社会か、ヨーロッパのように国家がさまざまな問題に対処する福祉社会か。今までの日本は家族でした。家

族でリスクに対応しようというのが日本の特徴だったのですが、現代の日本社会では、誰が人間生活において発生する諸々のリスクの担い手なのか、明確ではありません。どういう方向がこれからの日本にとって一番いいのか、今後日本人が決定しなければならぬ大きなテーマだと言えるでしょう。

ライフリスク研究センター開設記念 連続シンポジウム

「リスク社会から安心ある心豊かな社会へ」

第1回

「安心ある心豊かな社会に果たすスポーツの役割」
(10月3日・寒梅館ハーディーホール)

日本サッカー協



会・川淵三郎名誉会長が「夢があるから強くなる」と題して講演。Jリーグ設立の経緯やその理念を紹介し、鹿島アントラーズと地域社会との関わりや、子供たちに必要なスポーツの環境などについて語った。続いて行われたキーノートレクチャーでは、当センターの松野光範特別研究員が、ソーシャルキャピタル(社会関係資本)に関して、Jリーグのコンサドーレ札幌北海道で開催されている昭和南山国際雪合戦の2例を紹介。大八木淳史氏は、高知中央高校ラグビー部セネラルマネージャーの経験からスポーツの教育力について話し、大阪大学国際公共政策研究科の山内直人教授は、スポーツとソーシャルキャピタルをテーマに論じた。

第2回

「安心・安全社会を求めて―安心・安全社会を構築するための制度とは―」
(10月10日・明徳館21番教室)

テレビでも活躍中の住田裕子弁護士が「安心・安全社会を求めて―変わりゆく社会の中で守りたいいのちと心―」と題して講演。長寿化の進展と認知症の問題、少子化や子育て・対人関係に起因する犯罪の背景などについて、自身の検事・弁護士、さらに一人の母親としての経験を踏まえて語った。続くパネルディスカッションでは、住田弁護士・橋本俊昭センター長と同志社女子大学卒業生で東京大学人文社会科学研究科の白波瀬佐和子准教授、本学社会学部の堀橋孝文教授が、安心・安全社会を脅かしているものは何か、安心・安全社会を実現するにはどうすればいいかの2つの論点から活発な討論を展開した。



来年度就職をめざす皆さんへ

豊かな人生のために 充実した学生生活を

就職を取り巻く状況

2009年4月採用の就職状況は、就職率が前年度に比べ0.5ポイント減の98.8%となり、昨年同様に一定の高い数字を示しているものの、金融機関を中心とする企業の業績悪化による少数厳選採用の傾向が強まっています。直近の学生の就職満足度調査においては、文系男子「大いに満足」98.7%、文系女子「大いに満足」93.3%、「やや満足」まで入れると100%。工学部「大いに満足」満足92.6%、「やや満足」まで入れると100%と高い満足度を示しています(10月30日現在)。

2010年4月採用(現4年次生)においては、いわゆるリーマン・ショックの影響による景気の大規模な減退から、企業は採用数を大きく絞り込んでいます。この影響は2011年4月採用(現3年次生)においても、明確に現れてくると思われます。2010年採用の就職状況では、内定を得

て就職活動を終えた学生が5割に達した時期が4月中旬であったのが、今年度はその段階ではまだ2割にしか達していませんでした。採用数の抑制と厳選採用の企業側の姿勢が顕著に表れた結果と言えるでしょう。また、厳しい就職状況において、早々と複数内定を得る学生と、内定をなかなか得ることができずに就職活動が長期化する学生の2極化傾向が一層進んでいます。この傾向は、採用側が求める高いニーズと応募する学生との間にギャップが生じていることと、学生側が消費者視点による企業の知名度をもとに就職活動を行っていることが大きな要因となっていると言えます。

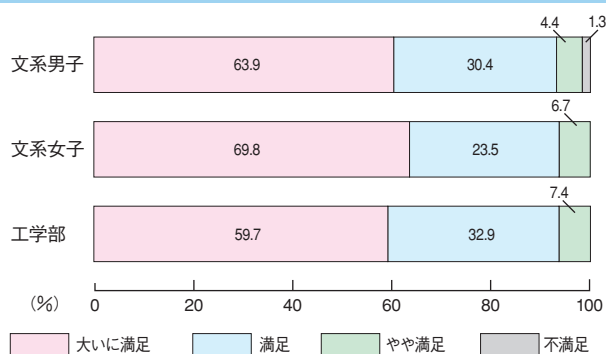
しかし、就職活動が長期化する学生も、就職活動を進める過程で、実社会の理解と自分自身の理解が進み、最終的には満足できる就職先を決定しています。

企業の求める人材

グローバルな競争の中、企業はどのような人材を求めているのでしょうか。経済産業省は企業人事部署を対象に、職場が求める社会人基礎力についてアンケート調査を実施しています。この調査は、企業が職場で求める能力の明確化を図り、企業の人材ニーズを把握するためのものです。その

な人材を求めているのでしょうか。経済産業省は企業人事部署を対象に、職場が求める社会人基礎力についてアンケート調査を実施しています。この調査は、企業が職場で求める能力の明確化を図り、企業の人材ニーズを把握するためのものです。その

就職決定先の満足度



今年度就職活動をした先輩からのメッセージ

(2009年度 就職に関するアンケートから)

●工学研究科女子「インフラ」早い時期から自己分析をしっかりと行い、会社を選ぶ軸を作っておくことが大事。●政策男子「金融」どの業界、会社に限らず、OB・OG訪問は積極的に行った方がいいと思います。セミナーや資料だけではわからないことが、直接話を聞くことで見えてきます。そして、行動力があることのアピールにもなります。情報はとにかく自分の足で集めてください。●文女子「金融」就職活動は選択して決断する場面が本当に多いです。自分自身についてこんなに考えたのは初めてでした。いろいろな価値観、判断基準がある中で取捨選択しなければならぬのは本当に大変です。●文情男子「金融」就活とは「活動」です。参加してください。HPを見るだけでなく、セミナーに出るだけでなく、セミナーに参加してやつと就活です。行ったらには何か質問したり、会社の良い点、悪い点、何かひとつでも持ち帰ってください。●法女子「建設」SPIなどの筆記対策は年内に終わらせておく方がいいと思います。とにかく就活はなんでも早めにとりかかることが大切です。早め早めにしており損はありません。私は周りを見て焦るくらいなら、私が焦らせる側になつてやろうぐらいの勢いで頑張っていました。●経済男子「公務」考えた志望動機は、必ず他人の目を通して、論理矛盾、論旨不明確がないか、こじつけではないか、他官庁でも通じる程度の浅い内容ではないか、といったことを点検してください。●政策女子「サービス」入社するための就活ではなく、「入社していきやすいための就活」をしてほしい。自分自身が心から「この会社」「一生を懸けたい」と思える「社」を見つけてください。●商男子「小売」就職活動において大切なことは、いかに相手に自分と一緒に仕事をしたいと思わせるかだと思っています。自分の人柄を正直に出

結果、企業が求める「職場や地域社会の中で多様な人々と共に仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」として、「前に踏み出す力（アクション）」「考え抜く力（シンキング）」「チームで働く力（チームワーク）」の3つの基礎的な能力から構成されると定義付け、その3つの能力を主体性（物事に進んで取り組む力）、働きかけ力（他人に働きかけ巻き込む力）、実行力（目的を設定し確実に行動する力）、問題発見力（現状を分析し目的や課題を明らかにする力）、計画力、創造力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の12の能力要素別に区分しています。

このアンケートに回答した約9割の企業が、新卒社員の採用プロセスや入社後の人材育成において社会人基礎力を重視し、中でも約8割の企業が主体性、実行力を求めています。しかし実際には、自社の若手社員に主体性、課題発見力が不足していると回答した企業も多くあり、企業が従来に比べ、即戦力としてより高いレベルの「社会人基礎力」を求めていることがわかります。

充実した学生生活を

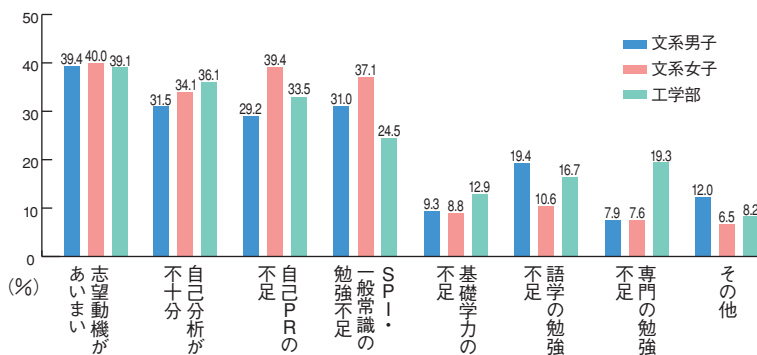
このような社会の中で、豊かな将来を築くためには、目標を持ち、問題意識を持って物事にチャレンジし、その経験の積み重ねや、ゼミでの勉強などによる学問の積み上げによって、充実した学生生活を送り、

自分自身を高めることが大切になります。すなわち、学生時代によく学びさまざまな活動に取り組む中で、「人間力」を蓄えることが重要となります。この「人間力」とは、人を思いやる心、コミュニケーション力、社会の出来事に対する好奇心、明るさなどで構成される、その人の人柄、人間的魅力です。

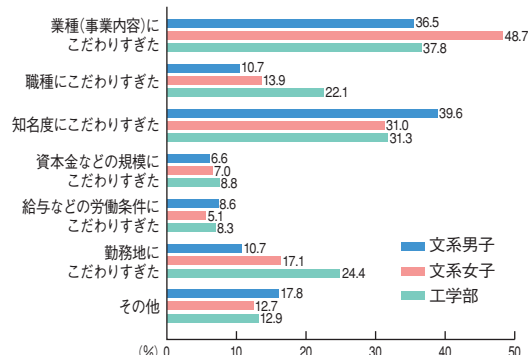
来年度就職を目指す皆さんへ

皆さんが就職に期待するのは、「社会での自立」「社会参加による貢献」「能力を活かした自己実現」だと思います。そのためにはまず、自分自身を知ること（自己理解）が就職活動の第一歩となります。そして自分のやりたいことがどのような職業、企業で発揮できるかを考えてください。そのためにはOB・OG訪問などで幅広く情報を収集することが大切となります。そして、業界・企業研究を経て、自分のやりたい職業・働きたい企業を絞り込み、業務内容をよく調べ、「自分はこの会社でどのように働きたいか」を話せるようにしておくことが大切です。採用担当者は、面接などのやりとりから、熱意、コミュニケーション能力、問題意識、行動力を見極める「一緒に仕事をしたいか」どうかを判断するからです。皆さんにとって魅力ある企業は必ず発見できるはずです。自分を信じて、就職活動にチャレンジしてください。

面接・試験段階での反省点



応募先選択段階での反省点



し、それで駄目ならその会社とは合わなかったとすっぱり割り切ること、そうして内定が決まった会社なら長く働き続けることができると思いますので、結果が出なくてもあきらめずに、粘り強く取り組んで下さい。●**経済男子**「ソフトウェア」自己PRは大事ですが、自分がその会社で働くイメージを持てるかがとても大切なので、面接はお互いを理解する場と捉えた方が気軽な気持ちで挑めます。●**生命医科学研究科男子**「メーカー」重要なのは自分が学生生活で取り組んでいることで成果を出すことだと思います。日頃の活動に懸命に挑むからこそ、将来の目標も見つかるし、自分のやっていることもきっとアピールできるのではないのでしょうか。●**神男子**「メーカー」エントリーシートは、論理的に簡潔な文章で具体例を取り入れて書いてください。そして、自分の長所や経験がどのように志望動機につながるかも意識してください。●**経済男子**「メーカー」自分の知っている企業について調べるにはインターネットは便利ですが、自分が知らない会社を見つけるには就職四季報などの紙媒体が役に立ちます。●**経済女子**「メーカー」就職活動には正解がありません。早く内定をもらったところが自分に合っているとはいえません。志望業界、職種が「絶対」ではありません。今知っている会社は、全会社数のごく一部です。また、説明会や面接で見えているのは企業の一側面です。たくさん悩んで考えて、自分の中の疑問を消して、納得のいく就職活動をしてください。●**法男子**「新聞」就活を通して大切にしていたことは、人との出会いです。多くの人の価値観を知ること、僕自身の価値観がよりはっきりと見えてきました。結果的に、人と出会い、話すことが自己分析にもつながったと思います。●**社会女子**「通信」辛いときもあつたけれど自分自身が成長できる、本当に素敵な経験ができました。新卒採用は一生に一度しかありません。楽しんでの勝ちです。自分らしく自分のペースで頑張ってください。